

Costume and Textile

No.31

服飾文化学会会報

2016年3月

2016（平成28）年度 第17回服飾文化学会大会のお知らせ

会員の皆様には既にお送りしましたお知らせのように、2016（平成28）年度 服飾文化学会 第17回大会を下記のとおり開催いたします。多くの皆様にご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

開催日 2016年5月7日（土）・8日（日）
開催校 文化学園大学（旧文化女子大学）
〒151-8523東京都渋谷区代々木3-22-1
【研究発表】【展示】A館20館A201番教室
【自由見学】文化学園服飾博物館

1. プログラム

5月7日（土）

13：30～15：20 研究発表

15：30～17：00 特別講演

演題「色彩からみる日本の化粧文化
一赤白黒の伝統美から色彩の現代美へ」

講師 津田紀代氏（元ポーラ文化研究所主
任学芸員）

17：10～17：40 総会

17：50～19：30 懇親会（スペース21）

※服飾博物館は7日（土）のみ開館ですので
見学は研究発表前をお願いいたします。

5月8日（日）

9：30～12：00 研究発表

作品・ポスター展示発表

12：10～13：10 昼食

13：10～14：40 作品・ポスター展示の説明・
質疑応答（展示会場にて）

※作品・ポスター展示期間

5/7（土）13：30～5/8（日）14：40

※作品・ポスター展示のショートスピーチを研
究発表会場で行います。詳細は送付します。

2. 参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
懇親会費	会員	4,000円
	非会員	4,500円
	学生会員	2,000円
	学生非会員	2,500円
昼食代（5/8）		1,000円

3. 発表・参加申込

（1）発表申込締切日 2016年3月23日（水）

①既にお送りしました「発表者へのお知らせ」（2種）に沿って、第17回 大会・総会
実行委員 福田博美までEメールにてお申
込み下さい。（必着）

②発表形式には、口頭発表・ポスター展示・
作品展示の3種があります。

③発表は未発表の研究報告で、発表は共同発
表者とも本会会員に限られますので、非会
員の発表希望者は学会ホームページから入
会手続きをお願いいたします。

（2）要旨原稿締切日 2016年4月20日（水）

（提出先：h-fukuda@bunka.ac.jp）

①用紙：A4縦置き、横書き、1枚

②余白：上25mm、下30mm、左右30mm

③文字：10.5ポイント、明朝体

(3) 参加申込・払込締切日 2016年4月20日(水)

ゆうちょ銀行 振込口座 00190-0-730457

加入者名: 福田 博美 (フクダ ヒロミ)

4. 特別講演について

◆講師 津田 紀代 氏

「色彩からみる日本の化粧文化

ー赤白黒の伝統美から色彩の現代美へー」

◆講演内容

日本の伝統化粧は、赤白黒の少ない彩色のなかで、いかに自然な化粧美を表現するかを大テーマとして発展してきた。髪も含めて、その具体例から、日本独特の洗練された美意識を探る。

また、近代以降、肌色などの色彩を知ることによって、新しい自然美を発揮する化粧美を追及していくようすから、変化する美意識と変化しにくい美意識などを探る。

◆講師のプロフィール

元ポーラ文化研究所主任学芸員、文化学園大学、愛知県立芸大非常勤講師。

長年にわたる東西の化粧文化、装身具文化史、美人論の研究、及び出版、関連展覧会の企画。

主な著書:『幕末明治美人帖』『幕末明治維新美人帖』共著(新人物往来社)、『カメラが捕らえた幕末明治大正の美女』監修(KADOKAWA)、『お化粧の科学』共著(日本化学会・東京書籍)、『華やぐ女・ロココ～アールデコの化粧』、『ヘアモードの時代・ルネサンス～アールデコ』、『遊ぶかたち・20世紀の香水瓶』、『輝きはじめた女たち』、『扇物語』、ほかに『化粧史文献資料年表』、『モダン化粧史』、『日本の化粧』等共著(ポーラ文化研究所)。

主な展覧会:華やぐ女・ロココ～アールデコの化粧、ヘアモードの時代、東西のよそおいの箱ほか(ポーラ美)、ロココ～アールデコのメイクアップ・ヘアモード(神戸ファッション美)、「美を競う(巡回)、西洋扇の美(栃木蔵の街美、MIKIMOTO、小倉城庭園美)、絵双六にみる女性のおしゃれ史(蔵の街美、小倉城庭園美)、日本と西洋の御粧(監修・小倉城庭園美)ほか。

5. 自由見学

◆展示テーマ【ヨーロッパ・モード】

宮廷が優雅な流行を生み出した18世紀のロ可可時代から、産業の発達や社会の成熟とともに変化する19世紀のドレス、若者や大衆が多様なスタイルを流行させた20世紀末まで、ヨーロッパを発信元とする約250年の女性モードの変遷を、その社会背景とともに紹介します。また、特集として20世紀を代表するデザイナー、イヴ・サン＝ローランを取り上げます。ディオールの後継者としてデビューした1958年から、活動的で新しい女性の美を打ち出した60年代、現代的なエレガンスを追求した80年代までを振り返ります。

開館時間: 5月7日(土) 10:00～16:30のみ

*入館は閉館の30分前まで

展示期間: 3月8日(火)～5月17日(火)

4月22日、5月13日は19:00まで開館

5月8日(日)は日曜日のため閉館

6. アクセス

【最寄駅】 新宿駅

JR(山手線・中央線・総武線・埼京線・湘南新宿ライン) 地下鉄(都営新宿線・都営大江戸線・丸の内線) 小田急線、京王線

【行き方】 新宿駅南口より甲州街道に沿って、初台方面へ徒歩7分

7. 連絡先

服飾文化学会 第17回大会・総会実行委員会

〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1

文化学園大学 服装史学研究室

福田博美 (h-fukuda@bunka.ac.jp)

TEL&FAX: 03-3299-2350

2016年度 総会のお知らせ

第17回大会において、総会を開催いたします。

本学会の発展のために、多数の会員の総会への参加をお願いいたします。

正会員の方は、5月1日までに、出欠を記載した返信はがきを事務局へ返送してください。

日時: 2016年5月7日(土) 17:10～17:40

会場: 文化学園大学 A201番教室

議事(予定)

・平成27年度 事業報告、決算報告、監査報告

・平成28年度 事業計画案審議、予算案審議

特集記事 「日本衣装絵巻」展と染織祭

北野 裕子（龍谷大学非常勤講師）

2015年（平成27）10月17日～翌年1月12日、神戸ファッション美術館で「日本衣装絵巻―卑弥呼から篤姫の時代まで」展が開催された。衣装100領と道具類で古墳～江戸時代までの日本の女性服装の変遷をたどる展覧会であった。

展示品は1933年（昭和8）に「染織祭」のために制作された復元品で、現在、公益社団法人京都染織文化協会が143領を保管し、これまでも部分的に公開してきた。今回は多くが着付けられ、一部は結髪もあり、祭りの雰囲気が再現された。



展覧会風景（神戸ファッション美術館提供）

「染織祭」は1931年（昭和6）から20年間、春の京都で挙行、現在、京の三大祭と言われる葵祭・祇園祭・時代祭と並んで、戦前は「京の四大祭」のひとつに数えられた。1930年8月末、室町問屋（京染呉服卸商）は内部や丹後産地と軋轢があり、「心をひとつに」と発案、これに京都府・市・商工会議所が賛同、官民合同で染織講社を設立し、祭りを主催した。とくに、同年、全国初の観光課を設置し、昭和恐慌期で苦境にあえぐ西陣を支援するため、西陣織物振興会を立ち上げた京都市の支援が大きかった。基幹産業の染織業界を盛り上げ、オール京都の産業振興を目指した。

祭りの構成は、染織を司る9神を奉戴して行う「祭祀」に、1933年（昭和8）からは「女性時代衣装行列」が加わった。なお、戦前の三大祭には女人列はない。時代祭の高貴な男性時代装束行列に対抗した。衣装の解説は『歴代服装図録1 染織祭篇』（1933年）に詳しい。上古は織殿の織女、奈良は歌垣、平安はやすらい花踊、鎌倉は女房の物語、室町は諸職の婦女、安土桃山は醍醐の花見、

江戸前期は小町踊、江戸後期は京女の晴着をテーマとし、8時代で構成された。この時代区分と衣装が正しいか、服飾史研究が進んだ今日、再検討する必要がある。歌垣は薬師寺女神像や正倉院宝物、諸職の婦女は七十一番職人歌合の絵、京女の晴着姿は現存の小袖など遺品や絵画等から調整した。

監修は関保之助（武家・有職故実）・猪熊浅麻呂（有職故実）・出雲路通次郎（有職故実）ら時代祭の装束も担当する研究者で、高田義男（装束研究家）・吉川観方（風俗研究家）・野村正治郎（古美術商）ら多くの実物遺品をコレクションする人々が協力し、高田・松下・荒木の京都の3装束店が制作・管理した。

この昭和初期は、西洋の染織技術や意匠などが使いこなせるようになった「近代染織の頂点」の時期であり、学術研究を踏まえ、染織業界を牽引してきた京都の職人たちが実物を超えたいという思いで制作した。墨で精巧な描き絵を施した辻が花染の小袖、経糸に生糸、緯糸に練糸で織り上げた練貫など、今では制作が難しいものも多い。

行列は1933～37年（昭和8～12）に5回挙行、日中戦争の開戦後、自粛された。戦後、1950年に復活した時代祭の行列に、その一部が女人列として加わったが、1953年に時代祭の女人列が新調されると役割を終え、人々の記憶から消えていった。

近年、文献や行列の映像も確認され、制作から80年余を経て、昭和初期の染織技術や服飾史を研究する上で、これらの衣装は今後ますます業界人や研究者たちの貴重な資料となっていくだろう。



染織祭風景（京都染織文化協会提供）

2015（平成27）年度 研究例会の報告

平成27年度研究例会は11月28日（土）、東京千代田区の国立女子大学で開催されました。「若手の研究発表会」と題して、2名の研究者による発表が行われました。出席者は学会員30名、非会員7名でありました。発表内容は次の通りです。

「礼装規範の形成と近代日本」

宇都宮大学非常勤講師 小山 直子

発表では、平成26年3月にお茶の水女子大学より授与された博士（人文科学）のための学位論文「礼装規範の形成と近代日本」の概要を述べた。

論文は、明治初期から昭和初期における礼装規範の形成の経緯を公文書や報道記録を通して分析し、男子の洋服による礼装規範の形成が近代日本の国民国家の形成に呼応していたこと、一方、男女の和服礼装は国家の服装規定としては正式に認められない中で、国民的礼装として普及した状況を明らかにしたものである。和服と洋服の二つの礼装規範を併存させる形で成り立っている日本の服飾文化の理解には、近代日本における「礼装規範の形成」の解明が必須であると感じたことが研究の発端であった。また、論文では、分析の視点を近代日本の国家体制の変化とそれが表出する服装規定との連動に置いた。論文は4章からなる。

第一章「近代日本における新服制の制定と礼装事情」では、明治前半の服装政策に関する法令と関連文書に基づき、当時の礼装事情を考察した。「通常礼服」と「通常服」という用語を抽出し、これらが国家の服装規定の枠組となっていたことを明らかにした。明治5年11月12日に太政官布告で制定された「通常礼服」が燕尾服を意味することは知られているが、「通常服」の登場の経緯は不明であった。明治21年に宮中参内の際の服装指定として、宮内省が「通常礼服」と記載すれば「燕尾服」を、「通常服」と記載すれば「フロックコート」を意味する旨を関係機関に通知し、それが採用されることで、国家の服装規定として読み替えられていったことを明らかにした。

第二章「近代日本におけるフロックコートとシルクハットの紳士像の普及：「通常服」「黒高帽」という国家の服装規定」では、明治30年代後半、西欧の流行はフロックコートからモーニングコートに、シルクハットから山高帽に移行していたが、日本はそれに逆行するようにフロックコートとシルクハットの紳士が増加した現象を取り上げた。国家的行事や会合に参加する紳士達が、宮内

省の服装指定である「通常服」「黒高帽」を享受することで、日本独自の普及拡大があったことを検証した。

第三章「明治後期から大正期における紋付羽織袴の社会的地位：通常礼服に起因した礼服問題」では、庶民に重用された「紋付羽織袴」を取り上げた。明治30年代初頭には「羽織袴」は式服に必要な形態上の統一感も備わっていたが、その着用者は宮中の儀礼式典はもちろん、宮中外の会合への参加も拒否されるなど冷遇される状況にあった。明治42年と大正14年の帝国議会衆議院に提出された二つの建議案の委員会審議の議事録から、当時の「紋付羽織袴」の社会的地位を明らかにした。また、大正8年の原敬内閣が政府主導で行った服制の改正についても取り上げた。

第四章「近代日本における一般婦女子の礼装規範の形成：歴史的事象としての「白襟紋付」」では、女子の礼装を史料に辿った。国家は女子に対しては勅令による「礼服」を制定しなかったが、そのことが男子の礼装規範の形成との相違を生んだ。宮内省の婦人服制は皇族や女官のみが採用する所となり、一般に模倣されることはなかった。明治20年前後の「白襟紋付」が貴婦人を作るという時期を経て、明治30年後半には誰が決めた訳でもないのに「白襟紋付」は普通の礼服と称されるようになる。婦人会など自主規制的な営みによって画一化する方向に形態を作り上げていった普及の現場を検証した。「白襟紋付」に関わる史料の検証からは、現在の「裾模様に江戸袂模様が施された黒の留袖」の源流が抽出できた。



小山直子氏

「中米グアテマラ高地マヤ先住民女性の衣文化に関する動態的研究」

慶応義塾大学 本谷 裕子

中米グアテマラの中西部高地には、後帯機（こうたいばた）で布を織り、その織布から衣を作り装うマヤ先住民女性が暮らしている。本博士論文は古典期マヤ時代（300～900）に起源を辿る後帯機での手織りとその織布の装いが、効率性や利便性、スピードを重視する現代においてもなお、なぜ継承され続けているかを考察とした。

当該地域のマヤ先住民女性の衣文化に関する先行研究には、衣文化そのものを包括的にとらえたものが大半を占めることから、本論では特定の村の、特定の衣の事例を掘り下げようと考えた。そこで中央高地に位置するナワラ村の女性用上衣ウイピルの変遷を、①考古学的アプローチと②民族学的アプローチから検証した。本論の独自性は、異なる研究方法で導かれた検証・分析結果を相互に関連させ考察した点にある。二つの異なるアプローチでの研究をおこなうことで、マヤ先住民女性の衣文化を動態的に解明しながら、織りと装いの文化的意味を考察した。以下、本論の内容を端的に説明していく。

まず本論の二章から四章は考古学的アプローチの分析結果で構成されている。ここでは国内外の学術機関で調査した写真資料と実物資料を使い、19世紀末から2000年までのウイピルの形態的变化を辿った。19世紀末に撮影された写真資料からは、女性の社会的地位はウイピルに織られる紋様によって判別されていたことが明らかとなった。この知見を踏まえ、次に国内外の博物館が収蔵する実物資料（ナワラ村のウイピル52点）を、デザイン構成・紋様・寸法・素材（糸の種類と色）の四点から比較検証した。その結果、この村のウイピルは紋様の種類によって四型に分類されること、紋様が女性の社会的地位の指標であること、社会的地位を象徴する紋様には複数のバリエーションがあること、紋様の色づかいには村独自の規範があることの四点が明らかとなった。写真と実物の検証結果から「ウイピルの型とその規範を認識しながら、後帯機で布を織り装う女性がナワラ村を構成し、服装の類似性が村の視覚的イメージを作りあげている」と結論づけた。

五章から七章までは現地調査で得た民族誌資料

をもとに衣文化の動態的分析をおこなう民族学的アプローチでの研究結果をまとめた。ここではナワラ村での参与観察とインフォーマント（情報提供者）へのインタビューによって作成された民族誌データをもとに、織りと装いの文化的意味を考察した。また、ナワラ村の女性のあいだで、これまで織りと装いの規範がどのように継承され、服装の類似性はどのように作られ共有されてきたかを検証しながら、最終的には織布を介した女性のインフォーマルなネットワークの実態とそのメカニズムを解明した。

五章では、織物生産の実態を男女別に比較考察し、女性の手織り布が観光経済という新しい経済システムの中で商品化され、男女間の生産関係に変化が生じた点を明らかにした。六章では、後帯機という先スペイン期起源の機織りが今も実践されている事実に鑑み、「不変性（連続性）」と「変化」の二側面からマヤの衣文化を考察した。七章では、見知らぬ女性のあいだに布の貸借を推奨する先人の言説「コストウンブレ（costumbre）」の分析をもとに、織りと装いのいとなみから生み出されるマヤ的レジリエンス（回復力）のメカニズムを解明した。

考古学的アプローチと民族学的アプローチによって得られた調査結果、さらにはそれらを関連させて衣文化のメカニズムを考察した結果、ナワラの女性は後帯機という先スペイン期起源の機織りとその織布によって、土地とのつながり・先祖とのつながり・身近な人々とのつながりを装いというかたちで今日まで表し続けてきたことが明らかとなった。それを踏まえ、「グアテマラ高地のマヤ先住民社会では、女性・布・織機の三位一体が共生と調和を生む文化的装置である」という結論に至った。



質疑応答での本谷氏（左）と小山氏（右）

2015(平成27)年度 論文発表会の報告



会場風景

今年度の論文発表会は、2016年2月27日(土)に東京家政大学(最寄駅、十条)にて開催した。会場の準備に当たっては、会場校の能澤慧子会長をはじめ、大塚有里理事に多大なご尽力をいただき、美しいデザインの要旨集をはじめ、いろいろなご準備をしていただいた。また、当日はもちろん事前準備の段階から、東京家政大学の助手の方と学生あわせて5名の方にスタッフとして運営を手伝っていただいた。また同じく論文発表会担当の福田博美理事と知野恵子理事には、発表会までの諸準備を進めてくださった。当日は大変天候もよく、73名の参加者を得ることができた。

今年度の発表者数は、卒業論文・卒業研究が9件、修士論文が1件で、あわせて10件の発表申し込みがあり、テーマも多岐にわたったため、会の盛会が期待された。これも、日ごろからの学会会員の皆様のご協力の賜物である。

論文発表会は13時30分に開会した。会場は東京家政大学の正門を入ってすぐの大変きれいな建物の2階162B講義室である。まず、大綱美代子副会長(大妻女子大学)から開会の辞を賜った。発表会全体の司会は、論文発表会担当の福田博美理事

が担当された。大綱先生からは、「論文発表会が、学生のみなさんの大学生活における研究の集大成の発表の場になると同時に、他大学の学生や会員との学術交流の場になることを期待します」とのご挨拶をいただいた。

最初の発表は、共立女子大学の川井結花子さんによる「伝統芸能装束に見られる美意識と価値観—歴史的考察を中心に—」であった。日本の伝統芸能の中でもアジアに起源をもつ「舞楽」と「能」に着目し、日本の美意識や価値観とのかかわりを論じた内容であった。座長は福田博美理事(文化学園大学)が務めた。

2番目は、共立女子大学の渡邊瑛子さんによる「紅型の文化史的研究—琉球が生み出した染織—」であった。琉球王国時代から現代まで続く染織品である紅型について、史的整理を行ったうえで、第2次世界大戦後、どのような過程を経て現代まで技術が継承されているのかを論じた内容であった。座長は引き続き福田博美理事が務めた。

3番目は、同志社女子大学の藤井玲衣さんの「ジャンポール・ゴルチエ作品にみる性差の表現」であった。1980年代から2000年までのパリ・コレ

クションにおけるゴルチエの作品を資料として、特長的に表れる男性のスカートとコルセットに着目し、それらの意味を論じた内容であった。座長は鈴木桜子理事（杉野服飾大学）が務めた。

4番目は日本女子大学の山口永莉華さんによる「グスタフ・クリムトの作品にみられる服飾表現と女性観」であった。19世紀末ウィーンにおける代表的な画家グスタフ・クリムトを取り上げ、彼の作品にみられる女性の衣服の装飾表現の意味を探りながら、クリムトの女性観を読み解こうと試みた論文であった。座長は引き続き鈴木桜子理事が務めた。

5番目には、実践女子大学の在塚実季さんによる「子供服の大人化—子供服の流行の変遷と今後の展望—」であった。近年見受けられる子供服の大人と同様のコーディネートについて、ジュニアファッション誌を資料として分析し、さらに企業の商品企画担当者へのインタビューをあわせて考察した内容であった。座長は筆者（日本女子大学）が務めた。

6番目には、杉野服飾大学の田子文菜さんによる「V.ステパーノヴァの衣服デザイン」であった。ロシア構成主義のなかでも、画家でもあり、グラフィックや舞台芸術などでも活躍をしていたV.ステパーノヴァに着目し、その衣服とテキスタイルデザインを分析し、彼女が衣服の大衆化という新しい時代の先駆けになっていたことを論じた。座長は引き続き筆者が務めた。

その後休憩をはさんだが、やや時間が押していたため休憩時間を短縮し、3時25分から再開するとのアナウンスがあった。ところが、会場の機器の不具合が休憩時間中に判明し、会場校の大塚理事らの迅速なご判断により、急きょ隣の162A教室に全員移動をすることになった。不測のアクシデントではあったが、特に混乱はなく、3時40分頃に後半の研究発表を再開した。

卒業論文発表の後半は、主に実物制作に関わる研究であった。7番目は、大妻女子大学の安藤綾美さんによる「舞台における早着替え衣裳の制作・研究」であった。ミュージカルなどで登場人物の役柄が変化する際に衣裳の早着替えが行われるが、衣裳を「めくる」特性を中心に制作研究を行ったものだった。作品展示も行った。座長は伊藤瑞香理事（和洋女子大学）が務めた。

8番目には、文化学園大学の服部真実さんによる「ファンデーションの整容効果の違いについて—実物製作—」であった。人体の整容効果のあるブラジャーを取り上げ、1社の5種類のブラジャーの着用実験などの結果をもとに、商品企画・制作を行ったものであった。座長は、知野恵子理事（東京家政大学）が務めた。

9番目は、文化学園大学の前島美月さんによる「管楽器の演奏を考慮した衣裳提案—フルート奏者のためのドレス製作—」であった。フルート奏者が演奏時の腹式呼吸により人体形状が変化することに着目し、人体を三次元的に把握する石膏包帯法を用いて計測した結果からドレスを制作したものであった。座長は知野知子理事が引き続き務めた。

最後は、修士論文の発表が行われた。日本女子大学の小池しずかさんによる「17世紀末フランス宮廷男子服飾におけるchamarrer—Mercure Galantを中心に—」であった。西洋服飾史研究の中で言及されることはあっても、実態が明らかになっていなかった17世紀末の定期刊行物『メルキュール・ギャラン』誌の内容を明らかにし、そこに特長的に表れたシャマレという服飾表現の具体的内容を論じたものであった。座長は林精子先生（青山学院大学・非）が務めた。

発表はいずれもしっかりと準備が行き届いており充実していた。また質疑応答が活発に行われ、発表者たちが誠実に応答をしていたのが、好印象であった。

最後に閉会の辞を、岡田宣世副会長（女子美術大学）より賜った。発表者も多く、有意義な論文発表会であったことを参加者全員と共有し、会を閉じることができた。

その後、場所を1階の食堂「ルーチェ」に移して、懇親会を17時半まで行った。懇親会の司会は、論文発表会担当の知野理事が務め、乾杯の発声は荻原延元理事が行ってくださった。

懇親会にも多数の参加をいただき、論文発表会を無事に終えた発表者たちと、参加者との間の積極的な交流が見受けられ盛会であった。

最後に、学生たちに発表を勧めてくださった会員各位をはじめ、担当者の先生方皆様に、あらためて心よりお礼を申し上げたいと思います。

（論文発表会担当 内村理奈）

***** 会員より *****

■近著紹介

著者名：加藤なおみ

書名：『ローマを見た少年たち 天正少年使節の
“着物”をめぐる、ヴェネツィリアが書かなか
った史実』

発 行：南島原市 協力：長崎新聞社

発行年：2015年3月

著者名：徳井淑子、内村理奈、角田奈歩、
朝倉三枝、新實五穂、原口碧

書名：『フランス・モード史への招待』

発 行：悠書館

発行年：2016年

著者は本学会元会長である徳井淑子先生とその
若い仲間たちである。15世紀から現代のフランス
を対象に、新たな視点と史料を駆使して、時代精
神を切り取るダイナミックな服飾史に挑んだ論
集。

***** 事務局より *****

●会員異動（敬称略、申込み順）

☆新入会員（2015年10月以降）

正会員

加 藤 淳之介（文化学園大学）

大 石 あかね（文化学園大学）

学生会員

高 橋 由 子（共立女子大学大学院）

☆退会者

正会員

渡 辺 く に え

高野倉 睦 子

購読会員

全国生活協同組合連合会図書サービス

●会費納入のお願い

平成28年度分会費の納入をお願い致します。振
込用紙は27年度会報No.31に同封いたします。こ

の際、27年度以前の会費未納の方は、併せてお振
込みください。

郵便振込口座：番号「00150-7-184189」、口座加
入者名「服飾文化学会」

会費：正会員6,000円、学生会員3,000円

振込期日：平成28年5月末日

学会運営費は会員の学会費によってお
ります。平成28年度学会の円滑な運営
のため、平成28年5月末日までに納入
をお願い致します。

会報 No.31：2016(平成28)年3月31日発行

編集発行人：服飾文化学会

事務局：173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1

東京家政大学服飾史研究室

TEL：03-3961-8273

E-mail：nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp

URL：http://www.fukusyoku-bunka-gakkai.jp